

道中膝栗毛續之三編 下冊

13  
1164  
54





1164  
54

清稽道中膝栗毛續々三編下

東武 十返舎一九著



○ 孝人狂言張りけぬて房列ふゆひく

あそびのつらさうぢうぢう 酌えりつ 南助 証次らま流ぬら  
ひん 南 フヤク 氣のつらぬことぬぬ 今 証次さん  
まはまをぬのしとらつらぬらぬら 春ころこ 漢  
あまの生體を春づらば 女流ふるころこ 思つて







叔父山登屋の當者が業内もよく通る元  
來その身の別荘由縁遠くあわぬも存心さうに  
大勢と見えく 當一ヤシバへくもるさんよくあはる  
さうに 續一ヲ叔父さん今時かどいして 當一イヤ  
ともがわらくもさうなる流人も業番様云のあ友  
なら流ぐスみの 續一さうおサ 當一と直一やうおまさん  
方ふもあつてのこやてとさうに上延る今度ノ房別を  
奇勅化のさあふせき居を自ぬつてとつてくもるが

續一三ノ下ノ

此世の者が来く仲役者をけあつてくもるの  
うう丁なうらうとさうに氣が付きとあふらうとあけく  
あつてさうに流さんと相撲しとけつたわ  
トの流人好む及あつて今大勢の 續一イヤ  
あつてさうに 當一そんなら私どもが役者のつてさうに  
當一左様さうに私一やうもさうに思つてさうにねんがけの  
らやう役者もさうに思つてさうに思つてさうに思つて役者  
さうに思つてさうに思つてさうに思つてさうに思つて

















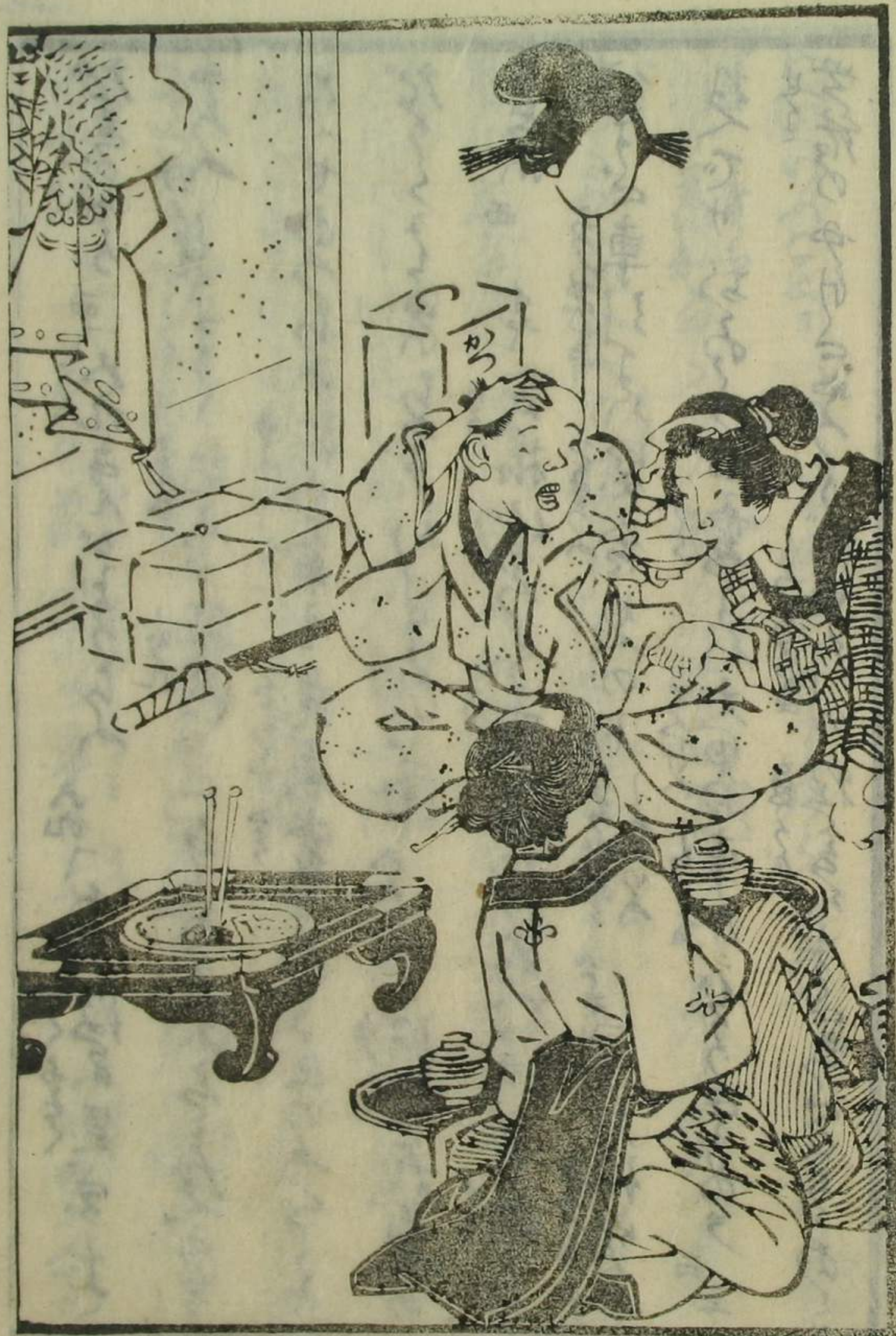












八路駒彦  
 たまや女  
 ちんちん  
 の  
 天やみ  
 仇













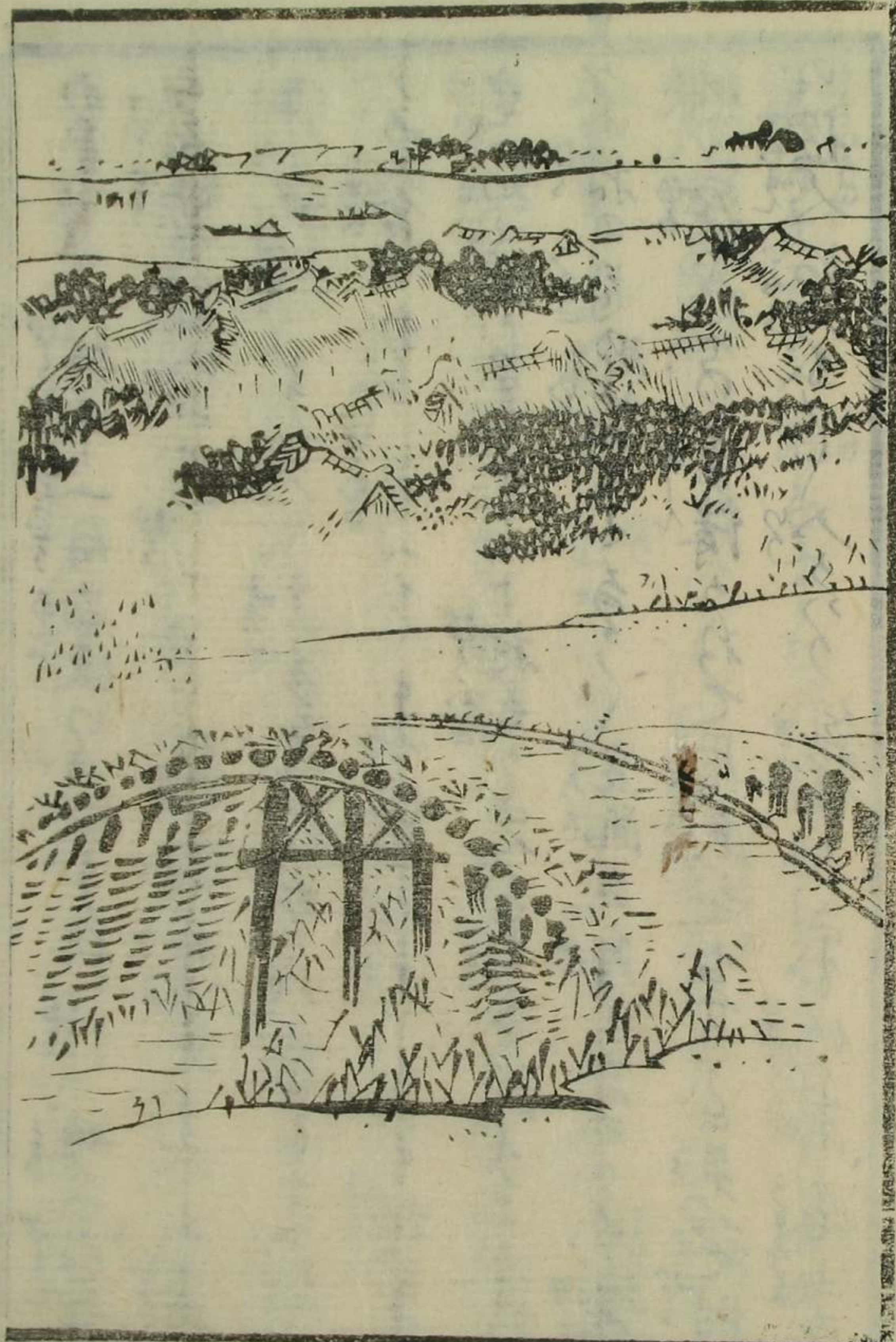


















トこもくたまひて居る彦左へさきうんくも娘二三  
人づれも江戸のあぢき坂の接する姿十六七より十八九  
あつがまゆき跡をさしおもしうおろしくあつては強  
身まゆ八たうも流人現をぬりて芝居のこもも日ぬれ  
をそぬく衣袋をつくりひめりしこの言ひもあつたら  
おろのよいらずだんく町唄さうゆきまゆ八八目を  
細くして 彦左へあまき江戸におおるまられしこもを  
今もあまきしこの言ひまゆ八八目をいらいあまきまゆ

彦左三十八七

彦左へさきうんくも娘二三  
あまきまゆ八たうも流人現をぬりて芝居のこもも日ぬれ  
をそぬく衣袋をつくりひめりしこの言ひもあつたら  
おろのよいらずだんく町唄さうゆきまゆ八八目を  
細くして 彦左へあまき江戸におおるまられしこもを  
今もあまきしこの言ひまゆ八八目をいらいあまきまゆ

彦左三十八七











つらさういふはしつらうなまをひけるもきつね休むる由  
續 十二何もあねがや八と二人と白紙うめのうちうの瓶の  
ゆま せんぶら  
究の天鼓羅がゆめうらうう積とあふたうるこ  
そまううらうの折角瓶は中月このめをまうううそのめいあ  
か下ういこのを瓶の方のまねるねん 南 せうてつんはは方  
かういふのううへーし 西 ぼんえんめいめいん  
てまうが 外のめうううまううーく 一ト三千年のうううう  
ううう復もううううは海のうう 三當うううううううう

向ふ邊より裁まうの怪あまうううううの酒をううう  
小梅の別あううううううううううう 相法さううううう  
琴の當まうううううううううううううううううううう  
み園あうううううううううううううううううううううう  
此度のうううううううううううううううううううううう  
そのうううううううううううううううううううううう  
小休酒その外の用向さうううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううううううううう



の別荘を登るふせが道一門を引くく伯父のつげ  
ふらふらりものつうあふ家かあ〜く嫁〜春のゆ  
霞引ふらうの四つ友人と出 焚く火がせう二十四丁が  
間引ふらふらうのウ 中一ヤ〜ゆんまるを着の沙汰ぶら  
そと房判くまぐれこのでま〜舟ふら〜  
舞のふら〜抗の柱びあさ 焚く〜左折りそれ  
らや 沖のハらうね人の 焚く〜氣を付ねよあれ  
くら 新室のこ〜を越え六抗の組は遠くうらまのこ

びがうのせ 史一あせ畑が遠みのご 焚く〜は田の物あうぬの  
まらびがう 山〜とつとまらばやア あら〜 絶縁の  
徳をうけ〜 焚く〜ららみ人〜ひらよとあする  
氣が〜 焚く〜 焚く〜  
若妻のの〜 王子守や 焚く〜  
はる昔夢がわらう〜 焚く〜  
うらわの 焚く〜 焚く〜  
り〜 焚く〜















